

「ヒューマニテイ」

山口優

「それでしたら、あちらの部署での手続きになります。あちらへどうぞ」
私は丁寧にそう言い、手を別の部署に指し示した。

「ちよつと待つてください。あつちでそう言われて、ここに来たんですよ。たらい回しですか？」

カウンターで私に向かい合う男性は、明らかにいらだっている。だが私としては、私の仕事に徹するしかない。

「あちらでお願いいたします」

「ですから、この手続きはここで、と言われたんですよ！」

「この手続きはあちらになります」

「どうなってるんですか?!」

「規則ですのぞ」

「どうなってるんですか、と聞いてるんです」

「規則ですのぞ」

相手の男性はうんざりしたような顔をした。

「あなたの代わりにロボットがそこにいたほうがマシですね」

そんな捨て台詞とともに、相手の男性は立ち去っていった。

私は何の感情もなく、凝った肩をとんとんと叩く。いちいち相手の感情に付き合っていたら疲れるだけだ。こうやって追い払うのが一番。規則は規則だし。

「次の方、どうぞ」

そう言おうとしたら、別の手が私の肩を叩いた。

「課長——」

課長が、残念そうな表情を作って、私を手招きし、奥の会議室へ誘う。

「リストラクチャリング、という言葉の実際の意味を知っているかね？」

おかしな問いかけから始まった。

「……再構築、ですか？」

「抜本的に構造を見直すということだ。残念ながら、我が課の構造は時代に即していない。市民からのクレームが毎日山のように来る。人件費も高い。そこで」

課長は大きいため息をついたが、その続きを言うのを躊躇わなかった。

「課長である私と、一部の有能な課員を除き、別の部署に異動してもらおうことになった」
「……はい」

会議室に呼ばれたときから、覚悟はしていた。

一カ月後、私はカウンターの反対側にいた。

別の部署に異動させられたが、その仕事は肉体労働で、全く私に合わず、ついに辞職することを決意した。それで、元の職場——就職支援課——に来たのだ。今度はそのサービスを受ける側として。

カウンターの向こうに座っていたのは、完璧な顔の作りの美少女。確実にロボットだ。なんでロボットなんか——と思ったが、人件費が高いと言っていた課長の言葉がその答えだろう。だがこんな機械に、人間らしい受け答えなどできるはずがない。

私は全く期待せず、不機嫌な表情のまま、書類を差し出した。

ロボットはじっと私の提出した書類を見ている。

「あの」

待ちかねて、私は声をかけた。ロボットの少女は、ゆっくりと顔を上げる。

「大変でしたね……」

最初に言われた言葉に、びっくりした。少女は眉根を寄せて、悲しそうな顔をしている。

「はあ」

どうせ擬似的に作られた感情だ、人間に似せて表情を作っているだけだ、と思っても、少女の態度に私の感情が揺さぶられているのは確かだった。

「安心してください。私はあなたの味方です。きっと探します。いいお仕事を。それまでずっと付き合います」

「それは……ありがとうございます」

「はい」

少女はにっこり笑った。

一時間近くかけて、少女はいろいろな部署に私を連れ回し、情報を集め、最終的に、私が就職してもいいかな、と思う職業を三つも探してきた。

「何かあったら、何でもご相談くださいね」

最後に、ロボットの少女は名刺を渡してくれた。

印刷された少女の名前と連絡先、そこに手書きで、「応援しています！」という文字が書き添えられている。

私はとぼとぼと家路についていた。

親身になってくれて、嬉しかった――。

素直にそう思ってしまう自分に、敗北感を覚えていた。

考えてみれば、相手の感情に付き合っただけで疲れるのは、人間だからだ。

ロボットなら、人間の感情は真似できるし、しかも人間と違って、疲れを知らない。じゃあ人間がロボットより優れたところって何だ……？

私はあのロボットが見つけてくれた職におそらく就けるだろう。

だが今度も、すぐにロボットに奪われそうな気がした。